A 武蔵野の環境と文化

当日のプログラムは、室内での調布市における里山の紹介と、市内布田地区の府中崖線と里山のガイド後、室内での意見交換としました。サポーターとして市内の自然環境に詳しい都立農業高校神代農場職員である小池氏にお願いしました。里山の紹介には、市民の環境モニターが作成した環境マップを使用しました。フォーラム参加者は30名程度で、市内在住の方は少なく、事前の紹介としてかなり理解に役立ったようです。会場を出発した一行は年配の方も多く、日差しの強いにも関わらず、約2時間のウォークを楽しみました。屋敷林ではケヤキやシラカシの立派さに圧倒され、堆肥として利用されただけでなく、機能の素晴らしさに、感心していました。府中崖線に連続する樹林地ではグミの実を味わい、雑木林の成り立ちとその機能を参加者で確認しました。また、崖線下に未だに営まれる水田の、田植えされたばかりの苗の清々しさに、感激する方もいました。意見交換では、全国から参加された方の地元との比較や、昔の生活の紹介がありましたが、全体として時間の関係からか踏み込んだフォーラムとできなかったのが心残りでした。

調布市環境部環境保全課　小豆畑耕一さん

調布市内にいくつかある雑木林で。木や草花の話をきいたり、都市における里山の今後の在り方を考えた

調布市民の環境モニターが作成した「みどりとみずのマップ」調布で見ることのできる里山の風景などが詳しく紹介されている

B 武蔵野からアジアを結ぶ

ピナットは「はちのこ保育園」（三鷹市）の関係者が、アジアの国々から来日した親やその子どもたちと出会う中で、1992年に発足したNGOです。

分科会では、ピナットの発足経緯と活動紹介の後、フィリピンを知るミニ・ワークショップ。ココナッツの床磨き道具やかき氷器、ミニバスの模型、小学校の教科書などのモノを使って、フィリピンの暮らしに興味を示す一方、「日本も昔は～」「日本では～」など、フィリピン理解と同時に日本理解も深められたようです。

昼休みには、調布駅前でバザーを開催中の調布WATの見学。調布WATは湾岸戦争をきっかけに市民が地域でできる国際協力をテーマに活動しているNGOです。バザーではリサイクル品を販売しながら、フェアトレード（公正な貿易）商品も紹介していました。

アジアのこと、世界のことは国や専門家が取り組むべきことと思いがちですが、一人一人が取り組むことで、世界で起きていること、そしてその中での日本や自分のあり方を考えるきっかけになるのではないかと思います。

ピナッツボ復興むさしのネット　出口雅子さん

ピナット事務局長の出口雅子さん。フィリピンのことを、わかりやすく身近に感じられる話をしてくれた

東京にNGOはたくさんあるが、その中で、ピナットやWATは、地域から海外協力につながる活動をしていて、学ぶことは多い

C 武蔵野フォーラムと2001年ボランティア国際年

調布に住むひとたちが地元で始めたボランティア活動です。

「向こう三軒両隣り」から「隣の人は何する人ぞ」と社会はすっかり変容してしまいました。老人クラブよ立ちあがれ！行政も巻き込んでひとりひとりを大事に支え合う社会を再生しよう！南塚さんの「小地域の福祉」を推進するネットワークのチャレンジです。

「染地かいわい」を考えた半田さんも、誰でも気軽に寄れるオープンスペースを創りました。ぶらり立ち寄り、何をしてもよい空間です。

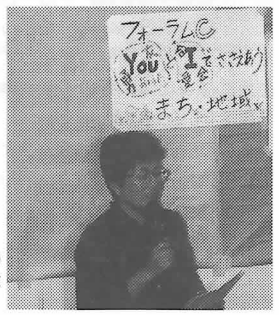
ちょうふ自立応援団は、「いつでもどこでも、車で送迎します。われらお手軽お助けマン」料金制のサービスですが、きがねは不要というシステムです。

小谷加代子さんは調布すずらん代表。「ヤングもいるよ！町のなか」調布市社協のヤングボランティアスクール卒業生たちが、イベントに参加したり毎月集まっていろんなこと話します。

今年は「ボランティア国際年」。世界各地でボランティアたちが、草の根の「コミュニティ再生」に取り組んでいます。地球を結ぼう、皆の手で！

IAVE日本　脊戸明子さん

調布を拠点に活動する4つのボランティアグループが集まり意見交換



全体会の発表では「YOU（友、勇）とI（愛、会、合い）で支え合うまち・地域」というメッセージ

D 地域の教育力をひらく

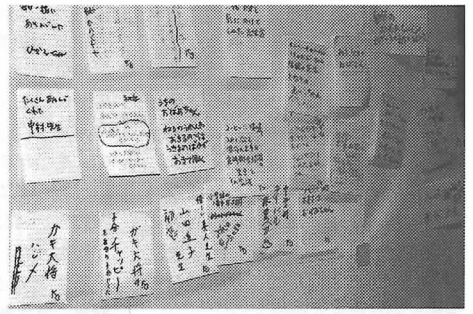
地域･人･教育、自分をひらき、地域の可能性をみつけるワークショップ。20代～60代まで、約40人の参加者による、「四隅で自己紹介」から始まった。

続いて、ほとんどの参加者にとって初体験となった「猛獣狩り」ゲームで、汗をかくほど大声を発し、身体をひらいていった。そして、6つの班に分かれ、自分の子ども時代に出会った地域のスゴイ人を、「なわばり地図」を描いて紹介する。

その人たちの存在自体が地域の教育力の源であり、より多様な個性を受け入れていくこと、すべての人に教育力が備わっていることに気がつくことが、学校教育の枠組にとらわれない「本来の教育＝学びの原点」をひろげていく出発点であると、気づいていった。 さらに、「地図」に登場した人物が「なぜ、スゴイ人だったのか。今、そういう人たちは私たちの地域に居ますか？」と、問いかけを進めていくと、地域にどう関わったらいいのか、「まず自分から発信しよう」、「PTAと学校と地域とは、顔の見える関係の中で普段から意見交換をすることが大事」などの提案が沸きあがった。

『地域とは、「ごった煮」の醍醐味がある。みんなが先生。』というのが結論づけ、そして出発点である。

東　宏乃さん



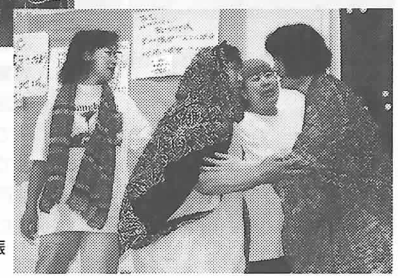
クレヨンで描かれたのは、ガキ大将、近所のおばさんの寄り合い、肉屋の主人、働く大人の姿、再開発の立ち退きに反対し公園に住むガンコ婆さん、自分にはない世界を持っていた同級生の女の子、熱血先生、初恋の人などであった

E 演劇ワークショップ

参加者がたった2名と劇団員4名という今回のフォーラムの中で最も人数が少なかったであろう「ベンガルおためし村芝居」。最初はシャプラニール劇団や村芝居についての説明を行ない、ストリートチルドレンのビデオを見ながら、質議応答。その後、バングラデシュ式発声練習をして、シナリオの読み合わせを行なった。配役を決め、もう一度読み合わせを行ない、早速、シナリオを手に立ち稽古開始。参加者の一人の女性は観劇するものと勘違いして、参加してみて、自分が演じると知ってびっくり。発声練習の頃にはこわばっていた顔も、立ち稽古を何回かする頃にはゆるんで、母親役の役づくりに没頭するまでに変化。主役の少年を演じた女性も元演劇部だけあって、演技が上手だった。昼食はインド料理レストランでカレーを食べ、その後、衣装を付けてリハーサルもそこそこに全体会で発表。半日の練習とは思えないような、感動的な公演であった。参加した二人はとても楽しく、演じることでの多くの学びのあったワークショップになったようである。

シャプラニール劇団　大出珠江さん

この日が演劇初体験という奥の2人。シナリオの読み合わせのときはまだまだ緊張した表情



全体会での発表の時は熱演を振るい、観る者の感動を呼んだ

F 親と子と“時”遊ぶ

「大人だって時を忘れてゆっくりしたい!!」そんな思いから生まれた企画です。当日は良いお天気に恵まれ、まさに絶好の日なたぼっこ日和。参加者は12人と少なく、最初は遠慮もあってか、“ただゆっくりする”という事に戸惑いもあったようですが、YWCA国領センターの自然に囲まれて時間がたっていくうちにどんどんと表情が明るく穏やかになっていきました。

大人たちは木陰で談笑したり、子どもたちは木に登ったり、走り回ったり、だるまさんがころんだをしたり。それぞれが思い思いのことをして時が流れていくことを楽しめたように思います。

何の決まりもなく自由に素直な気持ちで絵筆を動かした、最後にみんなが描いた絵はどれも力作。初めて絵の具を使って絵を描いたという小学生の男の子も絵筆が進むのか何枚も楽しそうに絵を描いていました。

特別なことは何一つしなかったプログラムではありますが、初対面の人たちがすぐに打ちとけあえて、日頃の喧騒を忘れて同じ時を過ごすことができ、今まで見えてこなかった事に気づく事ができたよい機会になったのではないでしょうか。

長　恵子さん

芝生の木陰にビニールシートを敷いて、大人も子供も思い思いの絵を描く

お兄さん達は、子ども達の格好の遊び相手に